

の住職、高橋達信さんが自衛隊に入隊、寺を出たのは昭和三十年のことであった。寺は、その時、すでに実質的に失われていたのである。

同じ頃、隣町、邑智町の谷合いの小さな寺で、一人の青年が自分の未来を賭けた一大決心をしていた。浄土真宗本願寺派・浄円寺の次男坊、西原正念さんである。ふるさとの寺を出て三十年、西原さんは昨年、千葉県松戸市に総額二億円(土地も含む)の寺を建てた。夢がかなった時、父と兄は亡く、ふるさとの浄円寺は無住の荒寺となっていた。

「年に一回だけな、地区のもんで報恩講をやらせてもらいます。この住職さんは、千葉県の松戸におられますが、ここ三年くらいは帰って来られんです」

寺の近くに住む、総代の太草功さんは、口の皮をむきながらぶつきたらばつに答えて、今年(昭和六十三年)は新寺院の建設が忙しいということで、八月の報恩講にも住職は帰らなかった。三万円が松戸

から送られて来た。里人十人が十円ずつ持ち寄り、合わせて四万円。隣村から僧侶を頼んでお参りをした。

「誰も行かんということになってもいけんけん、残ったもんだけでもやってい



邑智町の浄円寺。住職は都市開教のため不在だ

こうと。寺ちゆうものは、わしらの先祖が昔建立したもんですけえな。その流れがずつつと続いとるから、やっぱり浄円寺は守つていこうと、やつとる。そりや、これがいつまで続くか分かんせんすがな

休耕田に生えたススキが一陣の風に揺れた。数秒後、寺の境内の草むらがざわめき、破れ障子がパタパタと鳴った。

### 乞食同様の生活をこえて…

九月二十三日、秋彼岸。ふるさとに三万円を送っていた浄円寺住職、西原正念さんは、得意の絶頂にあった。彼が松戸で興こした天真寺の新伽藍が完成、この日、阿弥陀如来の遷座法要が行われたのである。タオルを巻いた本尊を両腕に抱き、集まった三百人の門徒の中を内陣へと歩む時、西原さんは心なしか胸をそらせた。

戦争直後、四万人余りだった松戸市の人口は、現在四十五万人。十一倍に膨れ上がった急増人口のほとんどが北海道や東北、中国、四国、九州などにふるさとを持つ人たちである。西原さんの賭けに誤まりはなかったのである。

住職の挨拶が朗々と響きわたった。

「…昭和四十七年、松戸市河原塚に天真寺を建立、都市開教に精進。急速な

\*『寺が消える』の反響 昨年12月23日付朝日新聞より。「同じような過疎地の住職として他人ごとではない切実感を覚えた。良寛さんのような生き方をならう僧が果たして何人いるだろう→

NHK放送総局  
NHK特集『寺が消える』制作担当

# 『寺が消える』取材記②

## 過疎の寺を出た住職と田舎の寺を護る住職の葛藤

### 三億円伽藍…天真寺

NHK特集『寺が消える』(昨年十二月十二日全国放送)は、島根県石見地方の三郡で、二百三十九のうち七十七の寺が既に無住であることを報告し、その数の凄さと、寺が消え

ることの具体的な諸相をリアルに描いて話題になった。しかし、ふるさとの寺が消え始めたのは、何も最近のことではない。NHKのドキュメンタリー番組『現代の映像』で『青空寺院』が放送されたのは、昭和四十二年、二十年以上も前のことである。前号でお伝えした川本町の開光寺

→うか。まして妻子を抱えては過疎地の寺を守っていくことは難しい。お寺も経済的に成り立たなければつぶれるということをも、見せつけられた。……」(福島県・光英大麟・68歳)



無住の高橋寺(邑智郡川本町)

る門信徒の増加に手狭となり、当金を作りに移転、これみな阿弥陀如来の御加護と門信徒の協力のたまものと深く感謝いたし…」

昭和三十三年、西原さんは勤めていた農協を辞め、宗教活動一本で生きてゆく決心をした。三十歳の時だった。広島と東京の仏教学院で学び、住職の資格を取った。活動の場を松戸に決めたのは、浄土真宗本願寺派の寺が全くなかったからである。人口が急増しており、その多くが宗教的には浮動層であった。

六畳一間のアパートに、親子四人が折り重なって寝た。初めの一年ほどは托鉢をし、ほとんど乞食同様の生活だったという。

「魚屋はね、托鉢に行くと言はれないの。生き物をやってる所は困る言うの。それで水ぶっかけられた、水をね。私もね、まだ若かったから、いや意地が悪かったせいかも知れんが、五回も六回も、何度も行ったね。それで、十回目に百円くれ

た。坊さん、大変だねって。今夜食べるものが無いから、一つお願いします、魚のしっぽ下さい、言うたら、頭をくれた。頭つてのは美味しいよ。胸のそこはね、本当に美味しいの。あの当時ね、コッペパンが十円か二十円。あれ一つ。有り難い。公園に行ったらね、子供がね、菓子残りを置いてある。それ拾って来てね、洗って有り難うございまして」

宗教活動といっても、初めは門徒はもちろんゼロである。西原さんは、まず葬儀屋や墓石屋に顔を憶えてもらうことから始めた。松戸市の八柱霊園のすぐ側に住み、毎日通った。宗派に関係なく、葬式や法事があると、押しかけのようにマメに足を運んだ。そうした中で、西原さんは松戸市の人口がほとんどが、田舎出身者であることに気づいてゆく。西原さんの飾らない、田舎くさい説教が意外に受けた。

「…この仏様にお参りしたから金がもつかるとか、商売繁盛とか、そんなこ

とはないですよ。そんなことはないの。でもお葬儀は大事ですよ。私、お葬儀の音を聴くのが大好きでね、心が安まるの。一円玉はあんまり音がしない。十円と百円の区別が難しいが、一円はすぐにわかる。でも、本当は、全然音がしないの。音のしないお葬儀、千円とか一万円がいいんだけどねえ。そうした心をこめて、ご先祖様、如来様を御礼参りさせて頂く。信心の世界、念仏の世界に目覚めさせて頂く。私たちが住んでいるのは無常の世界であります。永遠に滅ぶことのない真実、誠の世界に導いて頂くんですね。念仏して、生かされる人生、お陰様の、報恩の人生を生きぬくんですね…」

六年目。二畳と四畳半、二間の一軒家を墓石屋さんが貸してくれた。十四年目。一百万円の貯金と百万円の借金をして、ローンを組み、市内河原塚に「隠屋」を建て「天真寺」の看板を掲げた。念願の本立ちである。それからさらに十五年。

一合いで、せめて住む人がいなくなるまでお寺を運営できないものか、と思った」（横浜市・福永延江・主婦・52歳）。なお浄土真宗本願寺派では目下、1752の過疎市町村にある寺を調査中。

新寺院のために買っておいた土地が値上がりして、総額三億円にのぼる伽藍を建設するまでになったのである。建設費のうち七千万円は、四百人の門徒たちが寄付したものであった。

寺と住職が抱えるストレス

遷座法要の翌日、私たちは西原正念住職に、ふるさとについて、じっくりと話を聞いた。少し酒が入って、ほんのりと朱を帯びた師は、饒舌だった。

「都会は結局、金の世界なんだ。そこには、心も少しはあるけれども、金の世

界、殺伐として、いる。だから自殺者もある。私なんか、田舎があるということは、一つの救いなんだ。働いて、金縁いで帰る世界、それがふるさとなんだ」

「これから帰る人いるんですか？」

「ああ、いる。私も帰りたい。長男が跡を継いで、次男が小さい寺でも建てたら、私はふるさとへ帰りたい。こんなわずらわしい世界に生きたくない。やっぱり自然の中がいい」

西原さんは、実際に四、五年前に、ふるさとの浄円寺を七百万円くらいかけて

た浄円寺に、彼はほとんど帰っていない。想いと現実のギャップであろうか。

西原さんは、私たちの取材に、ある種の警戒心を抱いていた。一種のうしろめたさ、人にはいえない心の痛みがあったのだろう。

今回の取材で印象に残ったことがある。それは、寺の坊さんには何と酒飲みが多いことか、ということだ。法要後、必ず料理と一杯が出るということもあろう。しかし、私には、それだけではないように思われてならない。田舎には田舎の、都市には都市の寺が抱えるストレスがあるということが一つ。そして、重要なのは、田舎と都市を問わず、現代の宗教への深い懐疑のままざしに対する不安と迷いが、僧職にある者たちの心の底にすまいているのではないかと思うのだ。

西原さんにも、飲まずにはしゃべれない、という構えがあるように見えた。「浄円寺のある志君という地区は、今十五、六軒しかない。以前は三十二軒だ

●反響（13頁と同じ）「過疎が進んでも、お寺が進んでいいとは思わなかった。年々派手になってる葬儀で、大きく、裕福になる大都市の寺院。その一方で、この現実。同じ宗派による助け→



天真寺の本尊を抱える西原正念住師



西原師の都市州教宮前30年、3億円の浄円寺の本堂

ったから、半分以下になっている。で、田舎の人は金があるんだかないんだか、千円ずつ持って来るわけよ。それで法要ができないからって、私が三万円送る。田舎は寺が多過ぎる。うん、あれは合併した方がいいんだ。やっぱり民衆を苦しめたという面もある。村の人から寄付を集めたり、お布施も寺が多ければ馬鹿にならない」

言にくいことを、真つ赤な顔をして話した。もう、建前はかり話していても何の役にも立たないという奇立ちと、かといって、宗教の本来の姿を見失いつつある根拠的不安も抜き難く、西原さんも深く揺れ動いているように見えた。

「成功じゃない。こんなのは成功じゃない。金が出るとか、名譽を得るとかそんなものはくだらん世俗の世界だ。如来様に生かされて、この人生を終わった時に、ありがと、お陰様と死んでいく瞬間、それが成仏、仏に成ること、これが成功ということになる」

## 過疎に止まる…浄福寺

「わけ入ってもわけ入ってもあおい山」。種田山頭火の句を口ずさみながら、中国山地をへりコプターで飛んだ。瀬戸内からも日本海からも最も遠い奥まった山里に、大きな臺を見つけた。邑智郡羽須美村にある浄土真宗本願寺派の浄福寺は、天正十八年（一五九〇）の開基で、四百年近い歴史を持つ。十七代住職の小玉栄賢さんが、境内で手を振っている。七年前に中学校長を退職し、父の跡を継いで寺の活動に打ち込んで来た。六十七歳。地区の老人クラブの会長も務める。羽須美村の人口は、この三十年で半分に減り、およそ二千八百人。うち六十五歳以上の人が八百人を越える。小玉さんは、私たちのアンケートに次のように書いていた。

「高齢者が家庭の中に打をともす存在になって欲しい。経験やカンは確かに役に立たなくなったが、人間の生き方、平和

な家庭を築く原動力として、年寄りの役割は大きく、その自覚を強める取り組みを進めなければならない。そこに村の興亡がかかっているように思われる」

## 「歴史は繰り返します」

聞光寺や浄田寺の住職のように、結果的にふるさとを離れる人が次々に出てくる中で、小玉さんは、あくまで踏みとどまって田舎の寺の生き方を模索している住職の一人である。

九月十五日の敬老の日、地区の老人たちは、朝早くからゲートボール場づくりの作業に励んでいた。村有の、空地の利用と管理をまかされたためである。草むしりをする七十代、八十代の老女たちの中に、大きな槌を振り上げて杭打ちをする小玉さんの姿があった。自分も老人の仲間入りをした今、村に残る年寄りたちの心の支えとして、最後まで共に生きるのが、ふるさとの寺の務めだと考えるようになったのである。

浄福寺では、月に一度、欠かさず研修

→より17年先行していることが分かった。60年（国勢調査）の高齢者比率は17%と40年の2倍（全国平均は10.3%）。また過疎地の独居老人は60年で145,049人。全国平均3%の2倍。

会が開かれている。生活に身近な問題をテーマに、参加者が自由に話し合う。習俗や迷信について小玉さんが解説し、古い考え方を排して村の暮らしを合理的に変えてゆく実践的役割を果たしている。寺と地元の人たちのつながりが急速に薄れてきている中で、この集まりは、かつて日本の村々が賑やかだった頃の姿を彷彿とさせる。寺は、以前、村人たちが集まる広場であり、レクリエーション施設、教室施設であり、老人ホームの役割も兼ねていた。今、そうした役割は、ほとんど役場が果たしている。寺に人が集まらなくなった背景には、こうした事情も無視できない。小玉さんは、寺

のある地区が村の中心から離れ、五十数戸というまとまった規模を持つていることから、浄福寺がこうした役割をある程度保って行けると考えているのである。

小玉さんは寺などやめてしまおうと思ったことが、たった一度だけあった。十年前、当時二十七歳だった跡取りの長男が、胃ガンで急逝したのである。目の前が真つ暗になり、首をくくろうかと思つた程のショックだったという。長男と一緒に、四百年続いた寺の将来も、もぎ取られてしまったように思えたのだ。最近、僧侶をしている娘婿が養子となり、小玉姓を名乗って浄福寺を継いでくれることが決まった。跡継ぎがないばかりに次々と荒れ果ててゆく寺を見て来た小玉さんにとって、まさに地獄に仏だった。

しかし寺の経営が苦しいことには変わりはない。小玉さん夫婦の生活費は、実質的に教師だった恩給と年金に支えられている。寺だけでは一日も生活が出来ない。こうした中で、小玉さんは、B4判の

寺報『浄福寺だより』を週三、二、三ほど出し続けている。寺や村での出来事を書いた手書きの新聞である。町に郵送する分が五十通ある。都会に出ていった門徒たちとのつながりを絶やさないと考えているのだ。小玉さんは、奥さんと二人、発送作業をしながら、こうつぶやいた。

「結局、明治の初めに帰るんじゃないですか。人口動態がね。ただ、昔は若い方が多くて年寄りが少なかったが、今、逆三角形になっている。そこに問題はありますが、まあ、歴史は繰り返しますから、そう悲観したもんでもありませんね。一時、戦後、皆田舎田舎へと帰った人が、全部出てしまふ。そういう時の流れ、人の考え方。でも、今、都市の人は窒息しそうな感じじゃないですかね。だから田舎の緑が大事にされる時が、きっと来るんじゃないですかね。そう樂觀しとらなしようがないですねえ。ハハハ」

大きく笑つた小玉さんが、アンケートの最後にこう記している。「自己の生活

●過疎の高齢化 国土庁が今年4月14日にまとめた63年度版『過疎白書』によると、過疎地域（1157市町村）では若年層（15-29歳）の流出が激しく、この影響で高齢者比率が全国平均一



「小玉栄賢住職（中央）は過疎にも負けず、寺衆・僧侶・信者らと寺を盛り立てている」